



シリーズ 子どもたちの発達

～子どもの育ちを支えるために～

『その子を理解する』ことと、教育することについて

価値観やライフスタイルが多様化している現代においては、子育て、育児に関する意識も多様化しています。

少子化という社会情勢もあることから「いかにして良い子に育てるか?!」と、いわゆる“子育て本”でも、子育て環境の問題、親子関係から子どもの教育方法にいたるまで、ありとあらゆる情報が溢れています。にも関わらず、子どもが健全に育てない非行や犯罪や引きこもりなどの心の病等などは増加していたり、親の側でも子育てに対する不安や心配を訴える声も多くなっています。

このギャップは「情報があれば上手いく」という考えでは、十分に子育ての問題を解決しきれないことを示しているのでしょう。そう、人間は十人十色、子どもの育ちはそれぞれであり、子どもの成長に伴って、常に新たな悩みや心配事に遭遇する、だから一般化された情報や方法では、「この子の問題」への答えは見つけれられないのです。

さて、このような前置きの元で話をすすめると、最近の子育て本のテーマで気になることがあります。「良い子に育てる」「誉めて育てる」「やる気を持たせる」言葉や方法の教授から、叱り方、躰方まで、基本的には子どもに対して“優しく”接したり、言葉をかけたり、応答したりする為のマニュアル本が、どうもブームになっているようです。

私は乳幼児教育を行う者の感覚として、何か、イヤな感じを受けてしまうのです。それらの本の内容が全て間違っていると言っているのではありません。具体的には、そこで紹介されているようにすることは多くあるというのも本当です。

しかし、そうした How Toの前提である「子どもの全人格に対する尊重」ということが、どうも大人の姿勢の中ではおいてきぼりにされているような気がしてならないのです。私達は、真に子どもの人間性の育ち、成長に貢献できるよう、少しその点について整理し、保育、子育ての大切なことを考えてみようと思います。

<子ども理解と教育について>

実は、「叱る」「誉める」ことの意味は、同じように子どもにとって教育的なことであると思います。“その子を理解して受け入れる”ということと、“子どもに対して教育的である”ということは、両立してなければならないことです。その両方が、融合して大人によって調和的に行われることで、子どもの成長、発達に効果を及ぼすことになります。

つまり、子どもに良い影響として取り込まれるということです。私達が子どもの「問題」や「振るまい」に関わろうとする時、「上手い方法」とか「優しい言葉」という形に捕われる必要はないのだらうと思うのです。大人である私達が、子どもに対する時、子どもを一人の人間として、存在するものとして、対等な立場で、互いの価値観を分かち合おうと努力することが何よりも大切なことではないでしょうか。

なぜなら、大人も子どもも、それぞれが「どのような人間であろうとするのか？」という根本的な人間観を常に分かち合うことで、互いに理解したり、影響されたりしながら、学び、振り返り、その人自身として成長していくものだと思うからです。

しかも、“社会性を育てる”という意味において、子どもが人間として成長していく上で、常に、自分自身、仲間、周りの人や出来事、あるいは物(自然)との関連に気付いたり、関わることを学ぶことで社会性を身に付けていくのであれば、なおさら、大人と価値観を交え、分かち合うことが子どもに重要な意味をもたらします。

例えば、子どもの何か行為や振るまいについて、その子自身の目的やつもりを受け止めながらも、大人として(保育者、親)の私達が、そのことを「適切ではない」と思うのであれば、その事実について表明することは、とても大切なことだと言えます。

なぜなら、子どもの成長にとって、全てを“受け止められること”は、必要であっても“全てを受け入れられること”が正しい影響としてもたらされるわけではないからです。そのことは子どもの

姿において、甘え、依存、自立、自律などの子ども自身の在り方に置き換えると分かるのではないのでしょうか？！

子どもが“自分の在り方”を主体的なものとして獲得し、大人に強いられたことではなく行動していけるようになるためには、子ども自身が、自分の欲求と自分以外の周りのこととの関係に、その子なりに考えを巡らし、選び、自己決定していくという経験を身近な大人によって与えられていくことが、子どもを自己成長へ導く教育的な関わりとして価値を持つことになるでしょう。

そのような経験を通じて、時には思い通りにならないこと、周りの人と共存する為に自分の気持ちを折り合わせるなどしながら、自分の内面で自己主張と他の人との共感の在り方を、子どもは同時に学んでいくことが出来るのです。

そして、子どもにはそのように学ぶ力があることを私達大人は信じるべきだと思います。信じるからこそ、適切ではないと思ったことは本音で示す。示されながらも、子どもは受けとめられたことで納得し、でも受け入れられない現実はどう対処しようかと、子ども自身も自分の振るまいや判断に試行錯誤していくであろうことを見守るのが、本来の“優しさ”であり、子どものそうした自己成長の過程にじっくり付き合うことが、真に心の成長を支える大人の教育的態度ではないのでしょうか？！

それを言葉を換えていうならば、どのような「あなた」であっても見捨てない、どのような過程にある「あなた」をも認めているという子どもへの信頼に基づいた、愛情のメッセージとなって子どもを励ますことでしょう。私達が大人（保育者、親）として、そうしたことを意識することは、私達の存在そのものが、その子に関わる時にその子の成長にとっての意味ある“現実”“体験”としての経験そのものとなるからです。

“優しさ”の中身には「受容」ばかりではない、「願い」が必要です。

それは、子どもが人間としての成長過程で、自らを方向付けるという“自律”と“自立”をしていく為の能力を持ち、豊かに自己発揮していけるような力が培われることを願うということです。

「理解する」と「教育」することの融合や調和とは、このように“教える”ことで何かを強いるのではなく、様々な状況や様々な想いが自分の外の世界にはあるのだということを子どもに知らせるということでもあると言えるでしょう。私達大人は、まず恐れず自分自身の価値観を子どもに向けて表明する勇気を持つ必要があるのだと思います。

全てを「正しく」することばかりが子どもの学びになるのではなく、時には大人も誤り、修正する姿や努力を見せることも、子どもにとっては貴重な意味ある体験となることでしょう。子どもも大人も互いの人格を交える中から、人間らしさや自分の在り方が学ばれ、築かれていくことを、子育てや保育の考え方の真中に置きたいと思います。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage
園長 日下部樹江

